

八時就寢晝寢のたたりか中々寝つかず。

### 會議

- 一、昨日よりも大分秩序たちすべてに餘裕を覺ゆ
- 一、晝寢を廢して夜寢を成るべく早くし、會議の時を早めて、先生各自もつと睡眠時を造ることに注意すること
- 一、朝の集會を食前公園にて行ひ深呼吸をさせること
- 一、雨の日の日課について  
朝室内にて集會、お晝まで繪本、鉛筆畫等各自にもたせ  
午後は學校を借りること
- 一、訓練上もう少し積極方法をとるべくまづ「お早う」とおやすみなさいの挨拶を岡先生を家長としてさせること
- 一體に各園平常のお辭儀についての主義習慣などを問題として  
思ふさま相語る

十三日(四日)曇

## おばさん幼稚園

岸和田 佐藤 ます

子供等起床いつもより遅し

お早うの集り七時すぎ室内にて古内氏リーダー、岡先生お早う皆さんお早う歌で起きることから遊ぶまでの順序をお掃除から洗濯まで爲たのは子供等にとつて非常な興味であつたらしい今迄どうしても同化しなかつた王子の子供等もひき入れられてしまつた大成功

食後病兒を診て頂いて眠るわるい者お腹の冷えてゐるわるい者をのこし海にゆく、貝拾ひにかなり遠方まで出かけた連中、お晝頃にはあさり、えび、かになど澤山のえものをもつて勇んで歸つて来た

晝食後、晝寢の時を面白く遊戯にすゝし三時より海行。午前豫告の船一艘を浮べられて子供等の歡喜言語に絶す

お晝頃原先生御來訪、お菓子をおみやに夕方お歸りになる

二葉の留守番から子供等の留守宅訪問の様子を知らせて来た

南海の邊りに、工業地として知られた、可成賑かな町があります。舊幕時代には、さる大名の城

下でありまして、その城の天主閣こそ天火とやらに罹つて今は其跡形もありませんが、内壕、外壕

で圍んだ天主臺丈は、今も、そのまゝに残つてゐる町の人々に昔を偲ばせる一つの名所となつて居ります。蔦葛が生ひかぶさつた、昔ながらの古石垣、一抱にあまる大きな數十本の老松、秋の月が松の枝にかかる景色は、心ある人の足を永く停めしむるに足り、春、櫻の花が壕のぐるりに、薄紅の幕を張つた眺は、近郷の平和な民を集めて、歌舞興樂の庭を作ります。

この城下の下手に、數千の臺を並べた町が南北一里の間に延びて居ます。日夜黒々と煙を吐き出してゐる煙突が、二三十本立ち並んでゐるのを見ても、いつも乗客を満載した快速の電車が忙しく走つてゐるのを見ても、どんなに工業の盛んな、商賣の賑かな所かといふ事が、凡そ、わかりませう。南北一里の、その幾らか北に片よつた所に、おぼさんの幼稚園が御座います。幼稚園そのものは、僅か十六坪の建物一室と、百坪庭とがあるばかりですが、明を出て西に二町行けば、眞帆片帆

千鳥飛交ふ砂濱や、島通ひの汽船も走れば、時には軍艦の通航さへ眺めらるゝ海があります。東に行けば、山は遠いけれども、四五町にして連山を背景とした野原に出られます。春は、げんげ、たんぼぼ、すみれ、土筆と、とり／＼に、時のたつも忘れがちなる岡あれば、森もあります。夏は、池の汀に、小河の中に、小魚をすくふ樂もあります。秋は、千草に、蟲追に、其日の暮るゝも忘れやすく、冬は、雪なげ、雪すべり、四季折々の樂を盡すには充分であります。この自然の恵みの豊かな中に、建てゐる幼稚園は、丁度一昨年十月におぼさんの思付で、一週一度の日曜日その他、用のない建物を、六日間利用して、子供等の樂園としてやり度い、との心から始めたもので、思ひ立つたが吉日と云ふ譯で、天長節祝日と云ふ十月三十一日、おぼさんは早速、準備にとりかかりました。先づ室の内外を掃き清め、おぼさんの山から無雜作に折り取て町中を一人運んで來た大きな松の枝

と、菊の花もて室内を飾りました。玩具としては少しばかりの繪本と、色紙と石版とがあるきりです。此他には手洗用器と、掃除用具が用意されました。翌日おばさんは近所に遊んで居る四五人の子供を連れて来て、繪本を見せては、桃太郎や舌切雀のお話をしたり、石版に繪をかゝせたり、色紙で雀を摺せたり、海岸に砂遊をしたりして、望に満ちた最初の一日を、面白く、たのしく、あそびました。其翌朝、おばさんは、町内一軒毎に、勧誘して歩きました。其結果、二日目には、十四名の新客が集りました。又その翌日は三人又四人と、一週間もするうちに、早や三十名近くも、集つて來ました。従ておばさんも一人では到底やりきれさうにもなくなりました。時に天の恵みで、願でもない好伴侶を與へられました。それは一人ポッチで、裕福で、元氣で、熱心で、而も茶目式のおばさんでありました。それ以來、おばさん幼稚園は、名にそむかぬ二人のおばさんの本職場と

なりました。歲月は流るゝ水より早く、おばさんが松の大木をかついで、大道を御免と道行く人を追のけく運んで來ましたのは、ほんに昨日のやうな心地がして居りましたが、早一年有半を過し、二回の卒業式を了へ、七名と十四名の幼児を、學校に送りました。建物を初め、室内の諸道具、長い數脚の腰掛や一臺のオルガンなども、皆その初まつた當時のまゝですが、その後、追々特志家の好意で、幼稚園専用の、立派な戸棚が、する付けられ、中なる玩具の凡てが、大阪や神戸や岡山のおばさん達の賜で、充されたり、庭の草原にも、幼児にふさはしいブランコが四個と、スビリ臺が備へられまして、毎日子供等に、歓迎されて居ます。其上、親切なる畫家さんが、幼稚園の兄さんとして、時々遊びに來られては、可愛らしい人形の繪や、大きな動物の繪などを描いて下さいます。そして砂運びにも、野遊にも、綱引にも、角力にも、お相手となつて下さいます。

おばさんは此一年有半に、此幼稚園から、例令設備が不完全であつても、子供の教育は充分出来るものであるといふ、尊い経験と、確信とを得ました。園長はなく、小使はなくても、子供等は、朝來ればおばさんと一緒に、戸をあけて、掃除をする事を、知つて居ます。机がなくとも、腰掛が代用されて、事が足りります。下駄箱はなくとも、下駄は揃へてぬぐべきものだといふ事を、覺えて居ます。別に花壇がなくとも、家に開いた花や道に咲いてゐる草花等が、子供等の手に運ばれて、室内の飾となります。或は小さき草苗を見付けては園内に移植して、淋しい庭に、花を見る事も御座います。砂場がなくとも、二三町足を運べば、自然の與ふる廣大な砂場が御座います。而も此砂場には、貝や木片や草花等の玩具までが豊に備はつてゐます。自然の砂場にあげば小さき手に、風呂敷、袋、ざる等を携へ、砂持すれば園内に立派な砂場が作られ、それが土俵場ともなつて、小力士の取

組が始まります。時には幼き子等の所望により、おばさん同士の大關取組となり、小力士の満足となる事も御座います。又近所の工場から、粘土を惠まれて、園内は小職工の俄工場となる事も御座います。一週一度の、辨當持參の外遊は、幼兒の最も大きな樂の一つで御座います。或時はよそのおばさんに招かれて、お客様のお行儀で、お花見のお辨當を頂く事も御座いますれば、或時は濱の草原に、砂原に、新聞紙を敷物として、ピクニックを致す事も御座います。又或時は、池の堤や森の中に、樹の根を食卓として、戰場に於ける軍人氣取で、立食する事さへ御座います。時には百姓となつて、芋ほりにも出かけ、掘つたお芋を、おばさんの家でふかして、お腹一杯に喰べた上、まだ餘つた分を、名々お家へ御土産に頂いて歸つた事もあれば、畑の草引、田植の手傳ひ、俄やとひの小農夫にお百姓さんをこまらせた事も御座います。残りの苗をもらひうけて、子供もおばさんも

たすぎがけの尻からげ姿で、園内に俄仕立の田を作り、日毎に運ぶ水入にも、水車やら水鐵砲、つちかひ育てし甲斐ありて、秋の稔りも、にぎはしく、鳴子案山子に、鳥を追ひ、稻かり、稻こき、うすひきも、目出度すませて白米一合、金にも實にも、換へがたき此一合、はや正月も近づけば、今日はおばさんの家で、おもちつき、子供も、かあさんも、姉さんも、おばあさんも、一緒にお手傳ひ、おばさんが下す杵の音、子供が一齊にベツタラコ、はやすかけ聲勇ましく、やがて、机上に運ばれたおもちの数は、幾百十、あべかはもちにあんころと、舌つゞみやら、腹つゞみ、残りし分は、家づとに、私はかあさんとおばあさん、私は父さんと姉上と、兄さんにあげたら私のがなくなると、泣き出すもあり。此尊き賜物を、受けられし親達は、さぞ日本一のきびだんごにも勝る喜びを以て、味はれた事で御座いませう。

おばさんは、子供等が思切て、大膽に、無遠慮

に、それ／＼の個性を發揮する様にせしめ、之を善導し度い心から、毎日の遊の上にも、注意して居ますが、春秋の好時季には、毎日凡そ一時間づつ、四五人を連れて野外に出ます。あちらこちらと道を換て、目的の場所に参りますが、時には全く目的の場所なしに、唯ぶら／＼と歩く事も御座います。細いあせ道を歩ませたり、谷川の丸木橋を渡らせたり、高い草の堤を登らせたり、すべらせたり致します。これは最もよく個性を表はします。同一事を四五回くり返し致しますうちには、無鐵砲なる者は注意深くなり。卑怯者は順次安心的態度となり、大膽に、工夫的に、元氣者になり行く様子が、著しく表はれます。

秋の摘草、いなご追ひにも、春の土筆、たんぼほ、げんげ取りにも、海岸の貝拾ひにも、各々其個性が表はれて、其心のむき方の變化する様を見て云ひ知れぬ喜びを感じます。

去年の秋の末つかた、長幼合せて三十餘名を引連

れて、約二十町の野道を通つて、天神橋の森に遊んだ事が御座いました。途すがら小橋もあれば堤もあります、道の兩側には、稻田があつて、いなが澤山とんで居ました。かなり風の強い日で、太陽に雲がかゝればさむくなり、雲が過れば、太陽が現れて、暖くなります。そこで幼児互の問答が始まりました。甲「お日様かしこいな、お日様が顔出すと暖くなつて、子供もニコ／＼、お日様と子供と仲よしなあ」乙「雲あはやなあ」丙「雲とちがう、風あはや」甲「それでも風は花もさかすし、雨もふらすのやで」乙「それでも風は花をちらす事もあるし、大風が吹いたら家でも木でも倒れるで」丙「それは悪い風や」甲「エ、風と悪い風とあるのやで」乙「神様の云ふ事を忘れるのが悪い風なあ」おばさん「さうや／＼お日様はいつでも神様の云ふ事をようきく子や」乙「お日様エライなあ」乙「お日様エライなあ」一同「お日様萬歳」

やがて森につきました。森の中には神社があつ

て、掃き清めてあります。庭には檜の實が落ちて居ます。子供等は大喜び、各々のお辨當も打忘れて、拾ひ集めて居ます。所へ白髪の一老翁が、用事ありげに、こなたへと足を運んで參られました。

之は定めし此神社の主にて、此處は子供等の遊ぶべき場所ならねばと、お小言を頂く事と思ひましたのに、豈計らんや、言はるゝ言葉を聞けば、お茶の用意も出来たれば、皆の子供衆、我家に來りて、辨當使ひ給へ、といとも懇ろなる仰に、おばさんも一入恐縮しました。導かるゝまゝに、門をくれば、奥まりたる一室、仙人の住居かと思はるゝばかりの瀟洒なる客間へと招せられ、一同手足を潔め、容儀を正し、箸持つ手にも心して、お辨當をすませ、其上めい／＼に、おいしいお菓子迄も頂戴いたしました。やがて此親切な、やさしい老翁の御好意を、あつく感謝して、家路につきました。おばさんの家では、お誕生日のお祝を致します。丁度誕生日に當る子供に向つて、先づ各

兒より、おめでたうの祝詞をのべ、各兒の手になる細工物を、記念として贈り、茶菓の會集もて、互の健康を祝します。かくて誕生日は子供等の、最も樂しき人生を味ふ一日となつて居ます。おばさんの幼稚園の此頃は、朝は七時頃からぼつくと參ります。子供等はおばさんのおそい時には向ひに參ります。かくておばさんと一緒に朝顔の水

かけや雑巾がけ、お庭の水打と一通りに片付きますれば、緑の木蔭に、水鐵砲、砂場の日覆に、猿の如く柱のぼりや、軒づたひ、お室の中には、豆細工やら積木やら、切紙、貼紙、摺紙、タイコ、おてだま、まりつきと、思ひくのお遊に、おばさんも、子供も、暑さを忘れて、元氣よく、其日其日を過して居ます。

## ブラジルのお伽話

日本橋高等女學校  
附屬幼稚園保姆

檜 山 京 子 譯

### まだらの牝雞

昔、或處に白い小さい牝雞が居ました。或日、朝御飯にしようと、一生懸命地面をほちつて虫をさがして居ました。地面を掘りながら牝雞はひく

い小さな聲で「コッ、コッ、コッ」とくりかへし唄をうたつてゐました。

すると、不意に土の上に小さい紙片のおちてゐるのを見つけました。

『コッ、コッ、コッ、あゝこれはいゝひろひものをし